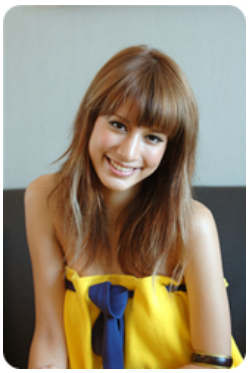
talk! talk! talk! タレント・マリエさん



タレント

マリエさん

自家用ヘリにクルーザー、日本以外にもパリ、ニース、LAに家があり……など、父親が会社経営をしているというセレブな生活が話題となり注目を集めているタレントのマリエさん。ファッション誌「ViVi」の専属モデルとしても活躍中だ。華やかさばかりが目立つ彼女だが、高校生のとき英語を学びに単身アメリカに留学、辛く厳しい日々も経験した。そこで心の支えとなったのが授業で学んだ写真だったという。今回はマリエさんにとってかけがえのない存在だという写真について、留学の思い出とともにお話いただいた。

プロフィール

1987年、東京都生まれ。父親がカナダ人、母親が日本人のハーフで、3姉妹の末っ子。10歳でモデルデビュー。現在人気ファッション誌「ViVi」の専属モデルを務めるなど、多くのファッション誌で活躍している。最近ではテレビへと活躍の場を広げ、MCやドラマなどにも挑戦している。「世界バリバリバリュー」（TBS系）、「Oxala!（オシャラ）」（スペースシャワーTV）、カラオケの待ち受け画面で放送される「DAM CHANNEL」、フジテレビラボLLC 「ワッチミーNEWS!」出演。
父親が会社を経営しており、"セレブなアイドル（セレドル）"としても注目を集めている。自家用ヘリやクルーザーを持ち、海外と日本に5軒の家を所有しているなど、ゴージャスな暮らしぶりが話題だ。セレブリティらしいおおらかな性格の中にも、誰にも頼らず単身でアメリカ留学を経験したりバイトをしたりと堅実的な一面も見せ、今後増々の活躍が期待される。

Beginning 出会い

きっかけはアメリカ留学馴染めず辛い日々の中で出会ったカメラ

写真を撮り始めたきっかけから教えてください。

写真を撮り始めたのは16歳のとき、アメリカのシカゴに留学したのがきっかけです。というのも、私は父がフランス系カナダ人で母が日本人のハーフなんですね。父と母はもちろん、2人の姉も留学経験があって英語が話せるんですが、私は生まれの日本育ちなので英語が話せなかったんです。でもこの顔ですから（笑）人からいろいろ言われて悔しかったし姉たちと同じように留学したいという気持ちがあって、それで16歳になる年にアメリカに行きました。
それまで家族が話す英語を聞いていたりはしていましたけど、書いたり話すことはできなくて、それどころか英語の授業も苦手っていう感じで。それなのにいきなり地元のハイスクールに入っちゃったんです。最初に扉を開けたときにまるで「ビバリーヒルズ※」を見ているみたいでしたよ。テレビの中の世界！本当にびっくりしちゃって。

英語が理解できるまではかなり苦労されたのではないですか？

はい、もう1人で大変で……何も話せないしわからないし、ずっと友だちはできませんでしたね。しばらくたってようやく初めてできた友だちがスティーブという男の子で、この子がすごくカッコ良くて私のタイプで（笑）。学校中の人気者のような人なんですけど、彼がいつも持っていたのがカメラだったんです。「何に使うの？」って聞いたら、「写真が好きで、写真の授業を取っているんだ。面白いから一度遊びに来ない？」って言われて。
ハイスクールには数学などの通常の科目の他にいろいろな種類の授業があって、自分で好きな授業を取れるんです。粘土制作とか、絵を書く授業とか、運転免許を取る授業とか。その中に写真の授業もあったんです。スティーブに言われてその授業に遊びに行ったらすごく面白くて、私も写真の授業を取るようになって、そこから写真を撮り始めました。

カメラの使い方なども、もちろん英語で教わるわけですよね。

そう、だからやっぱり最初は意味がわからなくて、先生が絵を書いて教えてくれました。丁寧にひとつずつ。だからフィーリングで覚えたような感じですね。逆に今、日本語でカメラの専門用語を言われてもわからないかもしれません。えーと、「露出を絞って」とか言うんですよね？

（笑）そうです。「絞って、開放にして」なんて言いますね。カメラの授業は言葉がわからなくても、最初から楽しむことができたのですね。

そうなんです。写真ってひとりの作業なんですよ。撮るときも、暗室にいるときも。向こうの授業はミーティング形式のものが多いので話さなければいけなかったりするんですが、でも写真ならば英語を話さなくていいのですごく気が楽だったんです。それにいい写真が撮れたら見せたりして「何これ？」って会話のきっかけになったりして、人とコミュニケーションを取るのにも丁度良かったですね。最初はそれで写真の授業が好きになったんだと思います。
でもだんだんと写真自体に惹かれていって、今は撮るのも焼くのも大好きですね。ずっと暗室に入っていたいですもん。ラジオを聞きながらずっとこもって焼くの、あの酢酸の匂いも好き！

ちなみに、カメラを始めるきっかけを作ったスティーブくんの腕前はいかがでしたか？

それがすごく上手だったんですよ！とても上手で……私、物に名前を付けるのが好きなんですよ。それで、使っていたカメラに"スティーブ"っていう名前を付けたんです。でも別に付き合ったとかはないんですよ。ほんとになーんにもなかった（笑）。
※「ビバリーヒルズ高校白書／青春白書」＝アメリカFOX局にて1990年より放送され、日本を含め世界各国で放送され話題となった青春ドラマ。若者が直面するような様々な社会的問題を織りまぜた群像劇。

Pleasure 楽しみ

自分の思いが込められた物をどう写真で表現するか

写真のどんなところに惹かれていったのですか？

目で見ていた世界と写真になったときの世界が全然違うんですよね。ファインダーから見ていたあの景色がこんなに綺麗な写真になるんだって思ったとき、感動しました。10歳からモデルを始めたのでもともと写真は身近な存在だったんですが、撮ってみたら今まで見ていた写真とは全然違うものなんだなって思いました。
それからモノクロ写真が面白いと思ったんです。カラー写真とは違う不思議な世界ですよね。色がないから写真自体の質とか良いところ、悪いところも鮮明に見えて来るような気がするんです。カラーの良さもありますが、モノクロだったから余計に惹かれたのかもしれません。本当に写真が好きになって、アメリカでは毎日写真ばっかり撮っていました。もちろん日本に戻ってきてから

もよく撮っていますよ。

どんなものを撮っているんですか？

うーん、風景写真よりも風景の中に何かあるという感じの.....どちらかというと、インパクトのある写真が好きなんです。それと自分と関係の無いものは撮りたくないという思いがあって、ただの風景でも知らない所ではなく思い入れがある場所だったり、物でもそう、自分が大事にしている物、思いが込められているものを撮るのが好きですね。

それは、大事なものを写真に残しておきたいという気持ちがあるのでしょうか？

自分が大事にしているものをどう写真で表現できるか、という部分に面白さを感じているんだと思います。たとえば好きな街を撮るなら、この街並みをどれだけ素敵に撮れるかって思うんです。普通に歩いているだけでは気づけないようなところを発見したり、こんな素敵なところなんだってわかるようにするためにはどんな風に写真に表現しようかって考えるのが好きなんです。あとは甥っ子が好きでよく撮るんですが、この子をどれだけ可愛く撮れるかって思って撮りますね。だから可愛く撮れたときが一番幸せ！「うわ、これ、チョー可愛いー！」って親バカみたいになります（笑）。

撮って、焼いて、出来上がった写真を見て、どの行程も楽しそうですが、その中でもマリエさんにとっての一番の写真の魅力はどこなのでしょうか？

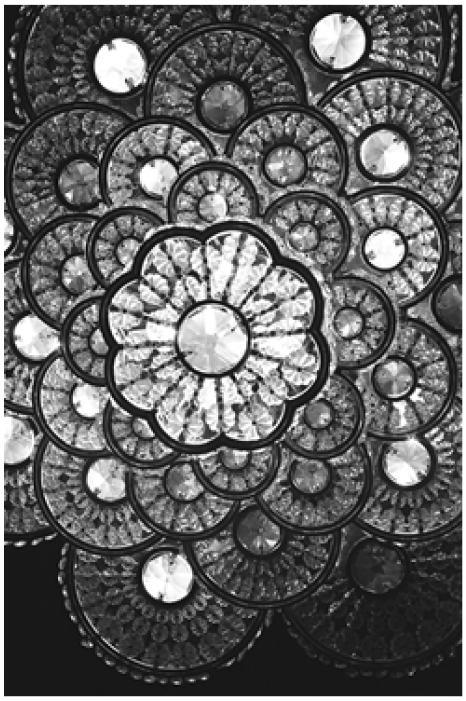
一番ですか？うーんなんだろう.....たぶん、どれかというのではなくて、抽象的なんだけどドキドキするところが魅力だと思いますね。カメラを持って出掛けると「何が撮れるんだろう」ってドキドキするし、焼くときもドキドキするし。
あ、でもしばらく経ってから写真を見返したとき、そのときの写真と思い出が重なって蘇ってくるんですよね。その瞬間が一番かもしれません。留学したときに撮った写真をよく見返すんですが.....あの時期は本当に辛かったし楽しかったし、私の人生でとても意味のある時間だったんですね。そのときにいつもいつも撮っていたから、今でもその頃の写真を見るといろいろ思い出しちゃって涙が出てくるんです.....だめ、こうやって話しているだけでもウルウルしてきちゃう（笑）。でもすごい、本当に良い思い出で。

マリエさんにとって宝物のような写真なんですね。

はい、宝物です。だから私は思いが込められた写真が好きなのかもしれません。後から見返していろいろ感じたいんですね、きっと。他の人に写真を見てほしいというのはないです。この気持ちは別に他の人に伝わらなくてもいいと思うんです。自分にとってはほんと、自己満足の世界なんです。

Photo's 作品紹介

マリエさんのお気に入り、そして大切な思い出の写真

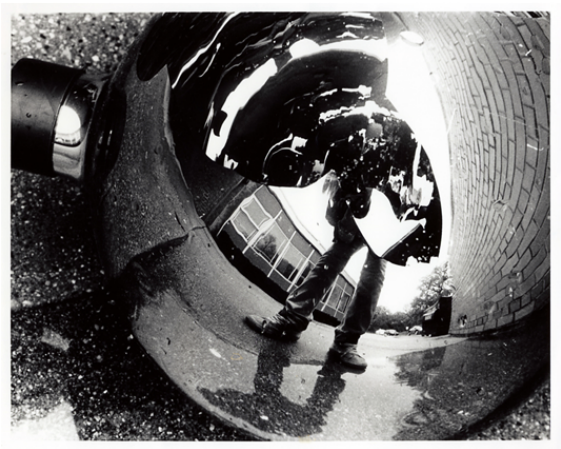


1 カラオケの待ち受け画面で放送されている番組のMCをしているのですが、その番組内の企画で撮った写真です。これは家具屋さんで撮りました。飾ってあったシャンデリアを下から写したもので、すごく気に入っているんです。今1番好きな写真かもしれません。オレンジの光がキラキラしていてモノクロで撮るのがもったいないなぁって思ったんですが、モノクロで見たら超かっこよくて。すごく好きですね。

2　同じく家具屋さんで撮ったものです。その家具屋さんのディスプレイは、家具が上から釣り下げられていたりするんです。モノクロだとわかりにくいかもしれませんが、中心にある額縁は額だけで、イスの下の絵は向こうの壁に飾ってあるんです。イスも片足だけ額の向こう側にあるんです。
ちょっと遠近感がわからないというか、コラージュみたいな不思議な写真でしょ？
こういう不思議な感じの写真も好きなんです。

3　これも番組の企画で、エアギターで有名な宮城マリオさんをモデルに迎えて撮りました。ノリノリでモデルをやってくれました（笑）。周りがミラーになっているランプで、そこに写っているマリオさんを撮ったもの。写り込みを撮るっていうのはたぶん、みんながよくやる手法ですよね。カメラを撮り始めたらまずこういう写真を撮ってみたくなるっていう、定番の写真かなと思います。

4 これはアメリカ留学時代の思い出の写真。ホームステイしていた家族に4歳くらいの男の子がいて、私も英語が話せなくて、彼もまだ流暢には話せないから一緒に英語を覚えたような仲なんです。3人兄弟の末っ子で、このときは3人で喧嘩をしていて彼が大泣きしているところを撮りました。ちょうどスーパーマンのマークのTシャツを着ていて、“すごく強い”のに“大泣き”っていうところがいいなと思って。ホストファミリーのお父さんとお母さんがこの写真をすごく気に入ってくれて、大きく引き伸ばして今家に飾ってくれているんですよ。

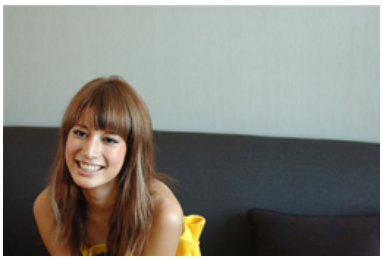


5 これもアメリカで撮ったもの。授業の一環で学生写真のコンペに写真を出したことがあって、入賞した写真なんです。壊れたミラーボールがあって、そこにレンズを半分くらい入れて撮りました。ミラーボールの中って不思議ですよね。割れて壊れた部分が写り込んだりしていて、すごく綺麗だなぁと思いました。

6 最後の1枚は、私が初めて撮って初めて自分で焼いた写真なんです。授業では最初のうちは講義ばかりで、なかなか撮らせてもらえないんです。ようやく「今日はカメラを持ち帰って好きなものを撮ってきてください」って言われてルンルンでカメラを持って歩いていたら、家の前に小さなかわいい女の子がいて。シカゴの冬はとても寒いんです。雪の中で大きな手袋と大きな帽子をかぶって立っている姿がとても印象的でした。

Future これから

素敵に歳を重ねながら 一生かけてやりたいことを追い続ける



マリエさんはモデルとしても写真と深く関わっていますよね。

そうですね。モデルとして仕事をしていると、写真1枚の大切さを感じます。フォトグラファーさん、スタイリストさん、モデルも含めて多くのスタッフが1枚の写真のために全員で気合いを入れて撮っているんです。「いい写真にしたい」っていう気持ちだったり、モデルも「綺麗に撮ってもらいたい」という思いがあったり、多くの人の思いが込められて1枚の写真ができる、とても魅力的なことだと思います。

思いが写真という形になって1枚の作品が出来上がるわけですね。

とても素敵なことですよね。前に、一緒に仕事をした女性のフォトグラファーさんが出来上がった写真を全部送ってくれたことがあったんです。その中に手紙が入っていて「本当はモデルさんには伝えてはいけないんだけど」って。「実は独立して初めて1人でやった仕事で、それを言うと頼りないなと不安に思われてしまったりモデルさんのテンションが下がったりすることがあるからあの場では絶対に言ってはいけないんだけど、1人で、しかもViViの撮影あのときすごく緊張していたんです」というような内容でした。手紙の最後に「それでも上手く撮ることができて、初めての撮影がマリエちゃんで本当によかった」って書いてくださったんです。私、それを読んだときに涙が出ちゃって……。（目に涙をためて）すみません、思い出しちゃって。その写真は、彼女にとってとても大切で、それが私の写真だったんだって思ったら嬉しくて、本当にモデルをしていてよかったって思ったんです。

モデルの仕事に、とてもやりがいを感じていらっしゃるんですね。

モデルの仕事は大好きです。私は将来、綺麗に歳を取りたいというのが目標で、歳を重ねてシワができても、それが自分の年輪のようになってその歳らしく綺麗でいれたらいいなと思うんです。その時期の写真を自分の年表じゃないですけど残していけたらと思うので、そういう意味でもいい仕事だし、50歳60歳になっても、どんな形でも写真を撮られていたいです。

最近ではモデル以外にもテレビの仕事にもチャレンジされていますよね。

はい。ViViで読者からの悩みに答える「マリエの相談室」みたいな企画があって、相談を受けるのがすごく楽しかったんです。もともと普段から相談を受けることが多くて、いろいろ聞いてあげたいし、話をしたい。そういう自分の気持ちや考えをもっとたくさんの同年代の人に伝えられたらいいなと思うんです。そのためにテレビに出たりして、自分を知ってもらえるように頑張っていきたいなと思っています。

今後、いろいろなところでマリエさんに出会えそうですね。

そうですね、絵を描くのも好きだから個展を開いてみたいなとか、本を出してみたいなとか、これからいろいろやってみたいことがあるんですよ！もちろん写真もずっと撮っていきたいし。素敵に歳を取りながら、自分が本当にやりたいことを、一生かけて追い続けていきたいです。

コンテンツトップへ戻る

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社ニコン 映像事業部
株式会社ニコン イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.